

大阪科学・大学記者クラブ 御中
(同時提供先：文部科学記者会、科学記者会)



発展途上国における栄養不良のパラドックス

2023年6月28日
大阪公立大学

ジンバブエの子どもが抱える肥満問題の実態を調査

<ポイント>

- ◇ジンバブエの子どもを対象とした「肥満」に関する調査。
- ◇**14歳～19歳の15.8%**が肥満または過体重。
- ◇問題の背景には保護者の認識不足やバランスの悪い食習慣。

<概要>

世界的問題である「肥満」。栄養不足・飢餓などの問題で注目されている発展途上国でも、実際には肥満の問題が深刻化しています。

大阪公立大学大学院生活科学研究科の Ashleigh Pencil 大学院生（大阪市立大学大学院生活科学研究科後期博士課程3年）、早見 直美講師ら研究グループは、ジンバブエの首都ハラレに住む14歳～19歳の子ども423名を対象に、肥満に関する調査を実施。その結果、15.8%が肥満または過体重であることが明らかになりました。また、アンケート調査より、27.1%の子どもが肥満に対する認識が低く、その理由には保護者が公的教育を受けていないこと、および食習慣に関する知識が不十分なことが有意に関連していました。

本研究チームは今後、調査対象年齢を広げ、発展途上国における肥満問題の更なる解析を進める予定です。また、子どもの肥満問題の解決策については、保護者の教育背景にも配慮しながら、子どもたちの食習慣の改善への貢献を目指します。

本研究成果は、2023年5月13日に国際学術誌「Nutrients」にオンライン掲載されました。

肥満に対する認識を高めるべく、肥満予防・栄養教育プログラムを設計し、食生活に関連する疾病から子どもたちを守りたいと思っています。
ジンバブエにおける健康意識の変革が必要です。



Ashleigh Pencil 大学院生

<掲載誌情報>

【発表雑誌】Nutrients

【論文名】Prevalence of Obesity and the Factors Associated with Low Obesity Awareness among Urban Adolescents in Harare, Zimbabwe

【著者】Ashleigh Pencil, Tonderayi M. Matsungu, Nobuko Hongu, and Naomi Hayami

【掲載URL】<https://doi.org/10.3390/nu15102302>

<研究の背景>

ジンバブエを含む発展途上国では、「低栄養」が注目されがちです。しかし実際には、食の欧米化などの影響により、「肥満」の問題が深刻化しています。本研究チームは、若い世代が人口の大きな割合を占めることから、思春期の肥満を予防・改善することが特に重要と考え、子どもの肥満率や子どもたちが肥満をどう認識しているのか、またその認識への要因を調査しました。

<研究の内容>

本研究では、層化ランダム抽出*により選出されたジンバブエの首都ハラレの学校に通う14歳～19歳の子ども423名を対象に、アンケート調査とデータ分析で肥満に関する調査を行いました。その結果、15.8%が肥満または過体重であり、特に女子において高いことがわかりました。肥満が健康上問題であるという認識が低い子どもは27.1%で、女子、14～16歳、肥満の子どもに多くみられました。認識の低さには保護者が公的教育を受けていないこと、および食習慣に関する知識が不十分なことが有意に関連することが明らかになりました。



調査に参加した子どもたち

<期待される効果・今後の展開>

本研究結果により、栄養教育を行い肥満の認識を向上させる際、保護者が受けた教育背景にも配慮しながら、子どもたちの食習慣の改善に努めることの重要性が明らかになりました。問題の背景には、文化的な価値観や個人の考え方も関わっているため、今後の研究では健全な行動変容が図れるよう検討を重ねていきます。将来的には、学校と家族を巻き込んだ子どもたち向けの栄養教育プログラムの実施につなげたいと考えています。

<用語解説>

※ 層化ランダム抽出：母集団を複数の層に分類し、各層からランダムに抽出する。年齢や性別に偏りなく調査対象を選出することができる。

【研究内容に関する問い合わせ先】

大阪公立大学大学院 生活科学研究科
講師：早見 直美（はやみ なおみ）
TEL：06-6605-2818
E-mail：hayami@omu.ac.jp

【報道に関する問い合わせ先】

大阪公立大学 広報課
担当：國田（くにだ）
TEL：06-6605-3411
E-mail：koho-list@ml.omu.ac.jp